邦子狂詩曲

ラプソディー

Rhapsody

Report 02

禍福はあざなえる縄のごとし

『手袋をさがす』から見える稽古記録

禍福はあざなえる縄のごとし

PICKUP エッセイ

『手袋をさがす』

『夜中の薔薇』講談社文庫／1981年

満足できないことの辛さ。野心家であった向田さんが現れているエッセイ作品。

1 “手袋”をテーマに、モノと動きとの距離感を探る。

出演者と助手による２人１組になっての実験。手袋を装着しているような質感を身体でつくり、相手と質感を比べる、動きを写す、視線を合わせるなど、互いに関わり合いながら動いてみるワークが行われた。スピードの緩急をつけたり、急に手袋が手袋ではないものに見せることはできないか？ということも話にあがり、試みた。

安永ひより（振付助手）

ふいに手が落下する・相手に迫る・絡まるといったように、手がモノのように見えた瞬間にドキッとした。ダンサーの意識が身体の外まで広がっているように感じた。反対に、手袋をはめた時の感触や温度を思い出しているときには、手袋の実体は、ダンサーの身体の中にあった。ダンサーの意識は身体の内側に集中しているように感じた。
意識を向ける先が身体の外側か内側か。
この違いが想像を広げているようで面白かった。

2 エッセイ『手袋をさがす』について話し合う

どういった身体表現へと繋げるべきか、メンバーそれぞれの認識を確認し合うように、共感ポイントや作者の大切にしている想いを探る。

感想1 傲慢だけど努力しない、自分のことを褒めているのか自虐しているのか、矛盾が面白い。

感想2 共感ポイントは何をやっても満足しない。続けていることがプライド。ハングリー精神。

感想3 身につけるものは、自分自身を現すもの。全部自分で納得したいのではないか。

感想4 “手袋”は実はどうでもいいのでは？“手袋”＝比喩の道具。存在しないものを求め続けている。

3 言葉に添う、振付。

❶のワークで生まれた手袋の質感を大切に保ちながら、『手袋をさがす』の一文一文に添うようなかたちで振付を連ねていく。文章から動きが見えるもの、逆に動きの見えない（想像しにくい）文章、固有名詞や接続語、一語一語分解し、そして構築する作業が繰り返される。

緒方彩乃（レポート構成）

「動きの見えない文章」という捉え方が新鮮で、そう意識して読むことも興味深かった。そういった文章に対しては「内面や状況を想像して動きにしていく」という方法、そしてそのアイデアを具現化する瞬発力が凄まじかった。一方で、文字を身体で現すというチャーミングな振付を差し込んでみる検討も、素敵であった。

レポート担当　構成：緒方彩乃　写真：アラキミユ